

【特集】 冷戦体制下のソ連・東欧社会主義圏 と西側世界の文化学術交流：冷戦体制下の ソビエト文化政策とウクライナ問題

進藤, 理香子[訳] / Soloshenko, Viktoriia Vitalievna / ソ
ロシェンコ, ヴィクトリア

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

758

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

2021-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025128>

冷戦体制下のソビエト文化政策と ウクライナ問題

ヴィクトリア・ソロシエンコ／進藤理香子 訳

はじめに

- 1 自由な思考と歪められた現実
 - 2 文学における「雪解け」と1960年代
 - 3 冷戦下の舞台芸術の発展
 - 4 抑圧下でのウクライナ映画
 - 5 ウクライナ・ソビエト社会主義共和国における絵画と美術
 - 6 ウクライナ・ソビエト社会主義共和国の音楽と西からの流行
- おわりに

はじめに

歴史上の様々な発展段階において文化とその進歩は常に人間の自然な知的欲求の対象にあった。このような意味において文化史研究は常に社会発展の重要な指標を成している。本稿は冷戦体制下のソ連文化政策におけるウクライナの位置づけに関し、ウクライナ側の視点から論じるものである。また検証の焦点は、フルシチョフ政権下の「雪解け」期におけるウクライナ民族文化の問題に向けられる⁽¹⁾。

ソ連邦の一共和国であったウクライナ・ソビエト社会主義共和国では、共産主義的道德規範、集産主義、社会的愛国主義、国際主義の原則が確立され、それらはあらゆる支配機構を通じ堅持された。当時の公式見解に従えば、これら全ての措置は、社会主義的社会の建設と単一共同体、すなわちソビエト人民の形成に寄与するものであった。こうして文芸や芸術といった文化領域は、それまでの社会を新たな社会主義体制へ変容させるための「車輪と歯車」の一部であることが要求されたのである。ソ連文化政策は、主に政権を支配する共産党とその中央委員会、そして党大会によって決定された。党は強権的な支配機構にあり、党の決定はその遂行のための手段として創出された様々なソビエト組織、共産主義青年同盟コムソモール、労働組合らの活動を通じ実行された。またその実施過程は党により厳格に管理された。ここで注意せねばならぬことは、社会の文化的発展の

(1) [訳者より]本文中に挙げられるウクライナ人名およびロシア人名に付記される原語表記は著者の希望により一律ロシア語表記としている。ただしその人名が日本においてウクライナ語読みで通用している場合、カタカナ表記はそれに従った。

基盤がソ連共産党中央委員会の公式決議を通じ、定められたのであり、これは全くもって上からの宣告であった⁽²⁾。こうしてソ連はその文化政策を通じ、市民の意識を変化させ、私有財産および宗教を否定し、共産主義的イデオロギーの基礎において新たな人間を形成するという目標を追求した。

研究状況に関して言えば、ソ連とその衛星国の文化的発展に対する冷戦の影響についてこれまで多くの検証がなされてきたが、その因果関係はなお十分には解明されておらず、とりわけ当時のウクライナ問題がこれにあたる。フルシチョフ期に関するソ連時代の研究は、概してソ連外交政策という大枠から社会的影響を検討するアプローチがとられた。そのためウクライナの文化問題はソ連文化政策というコンテキストにおいて、すなわち国家的枠組みにおいてのみ扱われた。この問題に関しては、アンゲロヴァ (М. А. Ангелова)、ベラシャプカ (Н. В. Белошапка)、ダニリユク (Ю. З. Данилюк) の指摘を参照されたい⁽³⁾。このようなソ連時代の研究上の限界から離れ、改めてウクライナ側の視点から雪解け時代のウクライナ文化の発展を検討する必要がある。このような意味において近年、バジャーン (О. Г. Бажан)、ダニリユク、バラン (В. К. Баран)、ザレツキー (О. Зарецький) らにより冷戦期のウクライナ文化・社会状況に関する史学研究が発表されている⁽⁴⁾。また文化領域の細分化された分析に関しては、クラシールニコヴァ (М. Б. Красильникова) およびセヴァスチャーノヴァ (С. К. Севастьянова) らの指摘を参照されたい⁽⁵⁾。加えて学術雑誌では『Cold War History』(London: Routledge)、ならびに『Journal of Cold War Studies』(Cambridge, Mass.: MIT Press) などが関連テーマを扱っている。

1 自由な思考と歪められた現実

相異なる社会経済システムを基盤とする二つの陣営間の対立として現れた冷戦は、ソ連文化と市民生活に多大な影響を及ぼした。1917年の革命的激動の中で誕生したウクライナ国家は歴史的には単に僅かな期間のみ存在した。第一次大戦末期から続く政局混乱の後に、ボルシェビキが最終的に権力を掌握し、ウクライナは1922年に創設されたソ連邦の一共和国となった。1991年のウクライナ独立宣言までの間、ソビエト政権は支配政党である共産党の指導の下、工業化、農業集団化、文化革命を通じ、莫大な社会的変革を推し進めた。

第二次大戦は、ソビエト・ウクライナの全領域を二度焼き払うほどの損害を与えたが、大戦後ま

(2) Белошапка Н.В. Государство и культура в СССР: от Хрущева до Горбачева: монография. Ижевск: Издательский дом «Удмуртский университет», 2012. С. 305-310.

(3) Ангелова М. А. Управление духовной жизнью развитого социализма как способ ее целенаправленного развития: (На материалах СССР и НРБ). Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата философских наук. 09.00.02. М. 1984 18 с.; Данилюк Ю.З., Бажан О.Г. Опозиція в Україні (друга половина 50-х - 80-ті рр. XX ст.). / НАН України. Інститут історії України. К. Рідний край, 2000. 616 с. Белошапка Н.В. (2012), 同上。

(4) Баран В.К. Цензура та ідеологічний контроль в Україні (1946-1960-ті роки). Україна: культурна спадщина, національна свідомість, державність. Львів: Інститут українознавства ім. І. Крип'якевича НАНУ, 2000. Вип. 7. С. 497-562.; Зарецький О. Українські шістдесятники і хрущовська відлига в етнокультурному просторі СРСР. Сучасність. 1995. № 4. С. 124. Данилюк Ю.З./Бажан О.Г. (2000), 同上。

(5) Красильникова М.Б., Севастьянова С.К. К вопросу о современных подходах к определению понятия «культура». Обсерватория культуры. 2015. № 4. С. 98-103.

もなくして経済・文化生活の再建が始まった。1944年3月にウクライナ科学アカデミーは、疎開先のウファやロシア奥地からキエフへ帰還した。1945年時点で267の研究機関が存在したが、1950年には462へと増加した。

ウクライナでは文化的生活領域が、政治的干渉を通じ歪められるものとなった。国家当局は芸術活動を生業とする労働者らの組合へ愛国的高揚を積極的に指導し、また共産党委員会による過度の干渉もあった。党はソビエト路線からの逸脱に対し厳しい態度をとり、創造的知識人に対する政治的キャンペーンが組織された。多くの芸術・学術関係者らがウクライナ・ブルジョア民族主義のかどで当局から告発された。ソ連ではウクライナの歴史家らはしばしば民族主義的とみなされ、かつてウクライナ民族のアイデンティティを主張したアントノヴィチ（В. Б. Антонович, 1834-1908）やフルシェウスキー（М. С. Грушевский, 1866-1934）の「反動的捏造」の再現であるとして糾弾された。作家や芸術家らの活動は常に当局の監視の対象となった。1947年にウクライナ・ボルシェビキ共産党中央委員会第一書記に任命されたカガノーヴィチ（Л. М. Каганович）は、とりわけ勢力的にこの闘争を行った。カガノーヴィチは1920年代にウクライナ化を積極的に推進したが、戦後はむしろウクライナ・ブルジョア民族主義の否定へ傾倒し、ウクライナ民族愛国主義的勢力の弾圧へソ連指導部や国家保安省を駆り立てた。

1946年11月にイギリス政府は、ウクライナ・ソビエト社会主義共和国との外交関係樹立という問題を考慮した。これに対するアメリカ側の反応は、米国務省欧州局長マテウス（G. Matheus）から国務長官アチソン（D. G. Acheson）に宛てた書簡に見て取れる：「ウクライナを個別に承認することは、我々とソ連との関係をより複雑にするであろう」（1947年）。ウクライナ問題に関する1948年当時の米国務省国家安全保障会議の見解では、ウクライナのソ連からの分離に対する支持は、米国のソ連との関係を危険にさらすものとして敬遠された。またこの時代「ウクライナ」という概念が、米政府では概ね機密扱いの資料でのみ使用されていたことは注目に値する。また1952年にムーディ（B. Moody）上院議員が、ウクライナ史における現段階を独立戦争時代のアメリカと比較したことは、民族問題に危惧するソ連共産党指導部を動揺させた⁽⁶⁾。同様にして1957年に大統領アイゼンハワーが「現在なお奴隷的地位にある諸民族らが自由を求めて闘争することを尊重する」と演説したことはソ連指導部を緊張させた。

ソ連当局は1954年に図書館から111冊の書物を排斥した。これを通じウクライナ文化は大きな損失を被った。ウクライナ人政治家や文筆家、例えばスクリプニク Н. А. Скрипник）、リューブチェンコ（П. П. Любченко）、エフレモフ（С. А. Ефремов）、オレス（А. Олесь）、ゼーロフ（Н. К. Зеров）等の著作が発禁となった。ブルジョア文化に対する闘争との名目で、ソ連ではウクライナ民族主義的表象の全てが迫害の対象となった。ブルジョア民族主義者との批判は、反体制派、民族主義的など総じて非共産主義的の見解をもつ人々に対し向けられた。民族主義的とみなされた者は国家保安委員会の監視の下に置かれた。全ての外国人が潜在的なスパイとしてみなされ、外国人と接触をもった市民、嫌疑をかけられた者の家族もまた当局から迫害された。イデオロギー的な押し付

(6) Украинская государственность в XX веке. (Историко-политический анализ). Украина во внешнеполитических доктринах США./ Руководитель авторск. коллектива Дергачев А. Киев «Політична думка», 1996 (URL: <http://litopys.org.ua/ukrxr/zmist.htm>).

け、党や国家による強制などありとあらゆる方法を通じて、全国民に対する完全な監視と管理が実施された。恒久的に続けられる被疑者の執拗な捜査は、刑事裁判の恣意性と法的保障の不遵守を正当化することへ導いた。このような事態は、訴追に携わる多くの法執行機関の通常の行動規範となっていた。ソ連の国家的文化政策は、民族解放運動をいかなる手段を用いても根絶することを目指した。自己の意志をもつという人間の最小の望みですら当局により弾圧された。ソ連共産党中央委員会を頂点にイデオロギー的統制はおおよそ社会のすみずみまで行き渡り、芸術家ら創造的労働者の組合に配置された党委員会を通じ文化統制が行われた⁽⁷⁾。

このような状況におけるいくらかの改善は、1956年ソ連共産党第20回大会においてスターリン崇拝と呼ばれた個人崇拝が非難されたことから始まった。このいわゆる「雪解け」として知られる時代は、ソ連の指導者フルシチョフの下で展開した党の新たな活動と結びついていた。こうしてソ連の歴史におけるスターリンの役割についての修正が行われた。

雪解けの数年間、ウクライナ科学アカデミーの諸研究所、ウクライナ共産党中央委員会付属党史研究所、また各種高等教育機関においてウクライナ文化の振興に重要な学術的成果が達成された。2巻本の『ウクライナ・ソビエト社会主義共和国の歴史』『ウクライナ哲学史論集』『ウクライナ共産党史』などの出版、さらにウクライナにおける内戦期と大祖国戦争に関する史的研究などが進められた。ウクライナ科学アカデミーの出版社であるナウカ、ウクライナの造形芸術と音楽芸術専門の国営出版社、1957年には児童文学に関する国営出版社、またハリコフ、オデッサ、リヴィウなどの都市でも各種学術出版社が設立された。

ソビエト社会を民主化する試みは、スターリンの個人崇拝批判から始まった。モスクワの新しい路線は、民族的自覚をもつ創造的知識人らを刺激し、1950年代後半にウクライナの文化領域でも転換点を迎えた。ウクライナの作家らは政治的抑圧を回避しつつ、ヒューマニズム、民族精神、郷土愛などを表現した。この時期、マリシュコ（А. С. Малышко）の詩『プロメテウス』（1946年）、ホンチャール（О. Гончар）の小説『旗手』（1946年から48年）がようやく大衆の手に渡るものとなった。オスタプ・ヴィシュニヤ（Остап Вишня）といった著名な風刺作家や喜劇役者なども活躍できるようになった。ウクライナの劇場も新しい方向性を模索した。1956年にモスクワのソブレメンニク劇場（＝現代人劇場）がモスクワ芸術座学校の卒業生らによるグループによって設立された。その1970年代の芸術監督はエフレモフ（О. Н. Ефремов）であった。テレビは日常生活に欠かせないものとなった。フルシチョフ期に続く数年間、文化はなお雪解け時代の自由な考え方を維持することができた。例えば1966年には大戦中に執筆されたウクライナの作家ブルガーコフ（М. А. Булгаков）の小説『巨匠とマルガリータ』の出版が許可された。

だがこのような一時的な緩和措置も再び当局によって制約され、社会主義リアリズムのアプローチが強化されねばならなかった。こうした変化の中で、当局に表面上の服従を示すため、芸術家は表現上の真意を歪めざるを得なかった。ソビエト経済の日常や、賢明な党指導部によって首尾よく解決されるといった筋書きの生産的小説は当局のお気に入りのジャンルであった。またソ連作家同盟の非会員は、その作品を公表する機会を全く与えられなかった。こうした中で、友情、愛、慈悲

(7) Белошанка Н.В. 前掲書、305-310頁。

を重んじ、ソビエトシステムには適合しない普遍的人間的価値を礼賛する吟遊詩人たち、例えばオクジャワ（Б. Ш. Окуджава）、ヴィソツキー（В. С. Высоцкий）、ヴィーズボル（Ю. И. Визбор）らが活動した。

同時期、ウクライナを含むソ連の科学者らと諸外国との学術交流が展開した。これらは党や当局の厳しい監視の下に行われたが、それでもなお大きな成果をもたらした⁽⁸⁾。ソ連当局の機関として1959年に設立されたウクライナ対外友好文化交流協会の活動目的は、ソビエト・ウクライナの文化・学術成果を世界に伝播し、西側による反ソビエトプロパガンダに対抗することにあった。本協会は、諸外国へ向けて親ソビエト的な記事や資料を作成し、積極的に海外メディアへ情報提供を行い、また諸外国へ芸術作品や図書を献呈した⁽⁹⁾。本協会の活動に関する資料やその通信記録が長年にわたり機密資料として分類されてきたことはソ連におけるその政治的重要性を物語る。

2 文学における「雪解け」と1960年代

1956年のソ連共産党第20回大会において、ソ連共産党中央委員会第一書記フルシチョフは個人崇拜とその諸結果に関する報告を行った。この歴史的な演説において、スターリンによる数々の犯罪行為の告発が行われた。ここで初めて個人崇拜が課されたことが明言され、同時に弾圧の犠牲者の名誉回復の必要性が訴えられた。

非スターリン化の開始と共に、これまでソ連国民を街中の至る所で待ち受けていたスターリンの肖像が撤去された。それまで独裁者の肖像画を展示していた美術館では大規模な展示作品の変更が行われた。だがソビエト社会は、もはや社会主義の聖像なしには生存できなかった。スターリン崇拜は、今やレーニンに対する高揚へと置き換えられた。ソ連ではレーニンの肖像化という大ムーブメントが政策的に引き起こされた。肖像画制作に加え、労働者の偉大な指導者レーニンに関する諸文献の出版も国家の要請に従い強力で推進された。この現象は結果的に途方もなく巨大な産業を生み出した。だがそれは社会から真には欲されていない芸術作品を大量に生産し景気を上向きにさせるといった悪質なシステムであった。

国際文化領域においてウクライナ・ソビエト社会主義共和国がユネスコと緊密な協力関係を築いたことは、この時期の重要な事柄に数えられる。ウクライナの博物館、美術館をはじめ、多くの文化施設がこれに関与し、また国際シンポジウムや学術会議が開催された⁽¹⁰⁾。

ウクライナ文化を体現する芸術家らに対するスターリン体制下の厳しい弾圧の時代がようやく終わり、その後に来た雪解けはウクライナ民族文化の再興へ新たな可能性を開いた。雪解けはま

(8) Архів Міністерства закордонних справ УРСР. Фонд. Генеральный секретариат 194/095. Опис. Представительство УССР при ЮНЕСКО. 25 января 1979 – 11 декабря 1979 гг. Справа 3760. 260 л.

(9) Дитковская С. А. Направления и формы работы Украинского общества дружбы с иностранными студентами (1959–1991 гг.). Историческая и социально-образовательная мысль. 2016. Т. 8, № 1–2. С. 67–74.

(10) Архів Міністерства закордонних справ УРСР. 104/087/5 Фонд. Питання культури. Частина I. Опись. Комісія УРСР у справах ЮНЕСКО. О подготовке ответа на вопросник ЮНЕСКО по статистике музеев. №09/53–2183 11.05.89. Справа 6720. 9 січня 1989 р. – 23 травня 1989 р.

さしく1960年代という時代と同様に新たな社会現象をもたらした。青少年運動は当初、党のスローガンを文字通り掲げたが、民主化の流れの中で次第に既存の体制に反発するようになった。若い芸術家らは急進的な方法での表現を試みたが、それはむしろ当局の公式路線から外れるものであった。ウクライナの知識人らはロシア化政策に抵抗しつつ、ウクライナ民族文化の再興に努めた。

1960年代という時代は文学の創作にも多大な影響を与えた。文芸分野では若い新しい波が到来した。1960年代の様々な民主化案では、ウクライナのソ連からの分離は想定されず、むしろ体制の自由化の進展を主な要求としていた。芸術家の中でとりわけ反体制的政治活動を行ったのはホルスカ（А. А. Горская）であった。演出家のタニユク（Л. С. Танюк）、詩人のシモネンコ（В. А. Симоненко）、スヴィトリチュニー（И. А. Светличный）といった人権活動家のメンバーたちと共にホルスカは1960年代にキエフの知識人が集ったクリエイティブ・ユース・クラブで会合した。

1960年代には斬新なアイデアをもつ多くの作品が発表された。中でも故郷ウクライナが誇る映画監督ドブジェンコ（А. П. Довженко）により執筆されたエッセイ「絵画と現代芸術」（『文学新聞』、1955年）は、「社会主義リアリズムの創造的限界を超える」ための初の提議であり、自由な創作的模索の新たな可能性を問うシグナルとして認識された。スターリン時代の粛清の犠牲者に捧げたソシユラ（В. Н. Сосюра）の詩『不死への銃弾』、彼の伝記的小説『トレチャロータ』、ベルヴォマイスキー（Л. Первомайский）の『野生の蜜』、チュチュニク（Г. М. Тютюнник）の小説『渦潮』などが、新しい状況に真っ先に反応した作品であった。またこれに続き散文詩ではパヴリチコ（Д. В. Павлычко）、ムシケテイク（Ю. М. Мушкетик）、ドラーチ（И. Ф. Драч）らが活発な創作を行った。また、ゴドヴァネツ（Н. П. Годованец）、マーキフチュック（Ф. Ю. Макивчук）、その他のウクライナの風刺作家らの作品も非常に人気を博した。またジューバ（И. М. Дзюба）、スヴェルステュク（Е. А. Сверстюк）、スヴェトリーチニー（И. А. Светличный）、チョルノヴィル（В. М. Черновол）らが文芸批評で活躍した。

ソ連およびウクライナにおいて最高の栄誉とされたレーニン賞とシェフチェンコ賞は、これらがウクライナの芸術家に対し授与された場合には、ウクライナ文化の功績がフルシチョフの雪解けを通じ国家的に承認された証としてみなされた。レーニン賞はドブジェンコ作の映画脚本『海の詩』（1959年）、ルイリスキー（М. Ф. Рыльский）の詩集『薔薇と葡萄』ならびに『遠い空』（1959年）、ステルマフ（М. А. Стельмах）の三部作『パンと塩』（1959年）、『人間の血は水ならず』（1957年）、『偉大なる一族』（1951年）、ホンチャールの小説『トロンカ』（1962年）に授けられた。ソ連では芸術を生業とする創造的知識人の育成を支援する制度があった。これを通じ、経済効率的な憂慮なしに創作活動に専念することができた。当局は表彰などを通じ芸術家に創作へのインセンティブを与え、また彼らの一部を他の国民よりも特権的な地位に押し上げた⁽¹¹⁾。

この時代、例えばクリシュ（Н. Г. Кулиш）、ミキテンコ（И. К. Микитенко）、エラン＝ブラキートニー（В. М. Эллан-Блакитный）といった作家によるウクライナ文学最高峰の諸作品が復権した。また若い才能のある詩人らが次々に頭角を現した。ジューバ（И. М. Дзюба）は『国際主義か、あ

(11) Белашапка Н.В. 前掲書, 305-310 頁。

るいはロシア化か』において社会主義リアリズムの拡大解釈の立場から民族自決権の問題を考察した。若い詩人らの代表格であったシモネンコ（В. А. Симоненко）は1962年に詩集『沈黙と雷』を著し故郷愛を詠った。1950年代末に雪解けを反映し、年若いコステンコ（Л. В. Костенко）がウクライナ文学界に鮮烈なデビューを飾った。

それまで国際的にみれば文化的孤立状態にあったソ連に変化が見られた。1950年代末にモスクワで開催された多くの展示会は新たな芸術的方向性をもたらした。1956年にはプーシキン記念国立造形美術館で二年間にわたる大規模なピカソ展が開催され、ソビエトの観衆はまさにカルチャーショックを受けた。1957年にモスクワでは第6回世界青年学生祭典が開催され、131か国からおよそ34,000人が参加した。これは鉄のカーテンの向こう側の世界と知り合う機会となった。また1959年夏には、モスクワのソコルニキ公園で米国博覧会が開催された。

フルシチョフ時代には、スターリンによる粛清の犠牲となったウクライナ作家らの名誉回復が行われ、それまで発禁となっていた彼らの著作が出版された。若い作家らは社会主義リアリズムの現代的古典作品ではなく、むしろ名誉回復された文芸作品を手本とするようになった。ウクライナの読者はしばしば共産党による批判の対象となるような新鮮な作家や作品のファンとなった。単純な思考、感情の率直な表現、ありふれた「ただの人」という言葉で表されるような「生きている人間」が文学の登場人物となった。1960年代の文学作品では、共産主義者らの理想主義的解釈とも言えるレーニン主義や、さらには「人間の顔をした社会主義」と呼ばれる潮流もあった。多くの者は真の意味における改善を望んだ。

雪解けによる政治圧力の緩和は、スターリン時代のイデオロギー的障害を克服し、現実に生きるあるがままの多面的な人間性への回帰をもたらした。だがその背後では、ウクライナ語の忘却やウクライナ民族の同化という由々しい危機が浮上した。若手詩人ストゥス（В. С. Стус）は、この問題について、マリシュコ（А. С. Малышко）に宛てた書簡で次のように記している。

「周囲の環境が一色に染まってゆく様子に注意を払い、ウクライナ人の大部分が直面している急速に進行する非民族化プロセスの結末を考えるならば、これは大変な悲劇であり狂気であることがわかる。[……] ホルリフカにはおよそ二、三のウクライナ人学校があるが、これらがこの先長く存続するとは思われない。ドネツクにはウクライナ学校は全くないように思われる。大変悲しい状況であり、我々には未来がないようだ。民族の根は農村に残っているだけである。[……] 児童の父兄による学校への口頭申請さえあれば、子供たちは親自身が育った言語を履修する必要もないのだ [……] ⁽¹²⁾。」

1962年に雑誌『新世界』はソ連の強制収容所における囚人生活を描いたソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィチの一日』を発表し、劇的な反響を呼んだ。公式に刊行される文芸書と並び、サミズダートと呼ばれる地下出版が知識人らの間に広まった。1960年半ばよりサミズダート

(12) *Центральний Державний архів-музей літератури і мистецтва України. ЦДАМЛМ України. Лист В. Стуса до А. Малышка. Рук. 12 грудня 1962 р.ф. 22, оп. 1, од. зб. 419* (<https://zbruc.eu/node/102879?fbclid=IwAR39kD9SwaluPR2xwYhfUZWTfGeAZFPM-vi3SwktpwCbHUoXsxDKviDKPyk>).

を通じ、スターリン時代の弾圧に関する文学的証人ともいえる驚嘆すべき作品、シャラーモフ (В. Т. Шаламов) の『コルィマ物語』が発表された。

ソ連諸民族間のコミュニケーション言語としてロシア語が使用され、それは1950年代から80年代まで事実上ロシア化政策を推し進めた。ソ連の学校制度は20世紀の後半にあってもなおソビエト的人間と共産主義の建設者を育成するための強力な手段であった。1955年6月にソ連閣僚評議会はウクライナ・ソビエト社会主義共和国の学校教育におけるウクライナ語授業をめぐる問題に関する諸決定を下した。学校教育における漸次的なロシア化に関する統計資料は教育の場からのウクライナ語の排斥という傾向を示している。ウクライナ共和国におけるウクライナ語学校への進学率は1959/60年度の全学生中70.6%、1970/71年度60.4%、1976/77年度57.8%へと年々減少している。これに対してロシア語学校への進学率は、それぞれ1959/60年度の全学生中28.6%、1970/71年度38.8%、1976/77年度41.3%へ上昇している。また1934年までウクライナの首都であったハリコフでは1950年代末から70年代初めまでの間にウクライナ語学校が144校から139校へ減少し、またキエフでは222校から106校へ減少した。これに対して、ジダーノフ、マキイフカ、ルビージュネなどその他の都市では全ての学校でロシア語による授業が行われている。1970年代から80年代にかけて、ウクライナ共産党中央委員会第一書記シチュルビツキー (В. В. Щербицкий)、およびその後のブレジネフ体制下では、ウクライナ語を学習することを拒否することすら可能であった。これはさしあたり一つの共和国から他の共和国へと常に転勤を要求される軍人家族の児童に対し認められた。あるいは児童の親が免除申請をすればそれで十分であった。

ウクライナにおける「雪解け」は、1965年に知識人たちに対する最初の逮捕の波が到来するまで継続したが、いずれにせよ1968年のソ連軍によるチェコスロヴァキアへの侵攻を通じ、ソ連全体としても最終的に終わりを告げた。

3 冷戦下の舞台芸術の発展

1950年代初頭にはなお、ウクライナの劇場と民族文化に対し当局から様々な干渉があった。だがその後の雪解けを通じ、演劇の水準はウクライナ古典作品に対する革新的な舞台芸術的解釈を通じ大いに向上した。こうしてウクライナの演劇界は20世紀アヴァンギャルド的模索の原点へと回帰し、とりわけかつて弾圧された演出家レス・クルバス (Лесь Курбас) や脚本家クーリッシュらによる1920年代の傑出した作品の復権が始まった。雪解け以前、当局はウクライナの知識人や音楽家らをしばしばイデオロギー的歪曲・ブルジョア民族主義と厳しく非難した。例えばムラデリ (В. И. Мурадели) の『大いなる友情』、ダンケヴィチ (К. Ф. Данькевич) の『ボフダン・フメリニツキー』、ジュコフスキー (Г. Л. Жуковский) のオペラ作品などは、ソ連共産党第20回大会後に当局がかつての誤りを認め復権が認められた。作曲家リャトシンスキー (Б. Н. Лятошинский)、コレッサ (Н. Ф. Колесса)、ヴェリコフスキー (М. И. Вериковский)、タラノフ (Г. П. Таранов) らに對しかつて向けられた不当な非難は、1958年6月24日のウクライナ共産党中央委員会の指令を通

じょうやく修正された⁽¹³⁾。

ウクライナにおける芸術生活における画期的な出来事は、1958年3月から5月にかけて開催された「第1回ウクライナ演劇の春」であった。ウクライナのほぼ全ての劇場がこれに参加し多くの観衆を集めた。1950年末から60年代の初めにかけて、ウクライナ民族バレエの新たな諸作品が上演された。コツェビンスキー（М. М. Коцюбинский）の小説を基にバレエ『忘れられた祖先の影』が創作され、1960年にイヴァン・フランコ記念リヴィウ歌劇バレエ劇場で上演された。1959年にはリセンコ記念ハリコフ歌劇バレエ劇場の振付けグループが演出し、ホンチャールの小説を基にしたナハービン（В. Н. Нахабин）作曲のバレエ『タブリヤ』が上演された。ウクライナの舞台芸術家らは、現代の人々のイメージとソビエトの現実を舞台上で再現することに努めた。リヴィウのマリア・ザンコヴェツカ記念国立劇場ではハラン（Я. А. Галан）の作品、またハリコフのタラス・シェフチェンコ記念国立歌劇場では、コルニイチュック（А. Е. Корнейчук）の作品、そしてシェークスピアの『ハムレット』などが上演された。冷戦下に実現したこれらの演目は、ウクライナ民族の高い精神的要請の証と言える。1963年にはウクライナにおける劇場上演目録には117のウクライナ作品が存在しリアリズムと伝統芸術の発展へ大きな貢献をした。偉大なる詩集『ゴブザール』によるインスピレーションから多くの芸術作品が生まれた。これにはマイボローダ（Г. И. Майборода）作の『タラス・シェフチェンコ』、マリシュコのテキストを基にメイトゥス（Ю. С. Мейтис）の八つのバラードなどが挙げられる。

ソ連では公式批判は、文化面での国家統制手段として非常に効果的であった。公式批判は決して否定されてはならず、これを通じ個々の芸術家の創作活動のみならず、集団全体の行動も修正された。すなわち公平かつ独立した立場にある専門家の評価による干渉をソビエトの文化発展モデルは許容しなかったのである。

閉ざされた社会、個人崇拜、歴史の歪曲に対しフルシチョフ時代になされた批判は、雪解け時代の舞台芸術へ新たなテーマを生み出した。すなわち東西どちらの陣営で暮らしていようとも、要は20世紀を生きる人間であるということに変わりはなく、精神領域では芸術という言葉によるコミュニケーションのみである、ということが事の本質として理解されたのである。

4 抑圧下でのウクライナ映画

ウクライナ映画の源流は、映画監督のドブジェンコ、サフチェンコ（И. А. Савченко）、俳優のブチマ（А. М. Бучма）、ウジュビー（Н. М. Ужвий）、シユムスキー（Ю. В. Шумский）らにある。また俳優のロホーフツェヴァ（А. Н. Роговцева）、カドチュニコヴァ（Л. В. Кадочникова）、クリニイツィナ（М. В. Криницина）、ストウープカ（Б. С. Ступка）らもウクライナ映像文化に貢献した。

雪解けの数年間に映画館の数はウクライナ全体で12,800館から25,400館へ増大した。映画製作

(13) История Украинской ССР: В 10 т. – Т. 9: Украинская ССР в период построения развитого социалистического общества (1945 – начало 60-х годов) / Ред. кол. тома: А. В. Лихолат (отв. ред.), Н. Г. Ищенко, М. П. Ким, Ю. А. Курносков, И. М. Маковейчук (зам. отв. ред.), П. П. Панченко, Н. Р. Плющ (отв. секретарь), А. Д. Скаба, П. С. Сохань. АН УССР. Институт истории. К.: Наукова думка, 1985. С. 487–491. 582 с.

はこの時期ゆっくりと回復し、1953年には6作品であったが、1954年から1963年の間に160以上の映像作品が制作された。ウクライナ古典文学も題材となった。イヴァン・フランコ（И. Я. Франко）作の『ボリスラフ物語』から発想を得たルイセンコ（Ю. С. Лысенко）監督の映画『石が話していたなら』（1957年）。コピリャンスカ（О. Ю. Кобылянская）作の文学作品に基づいたシュヴァチコ（А. Ф. Швачко）監督『ゼムリヤ（Земля 大地）』（1954年）。レフチュク（Т. В. Левчук）監督の歴史伝記的映画『イヴァン・フランコ』（1956年）およびカヴァレリдзе（И. П. Кавалеридзе）監督作の『グリゴリイ・スコヴォロダ』（1958年）が挙げられる。最も注目に値するのはミシュurin（А. А. Мишурин）監督らにより製作されたコメディ映画『ガソリンスタンドの女王』（1963年）である。スタリツキー（М. П. Старицкий）の戯曲を基にイワノフ（В. М. Иванов）が撮影した映画『Chasing Two Hares』は例外に数えられるが、この時代、一般的には社会主義リアリズムの様式を取り入れない映画作品は稀であった。これに対してソ連の戦争映画において顕著であったのは神話化という問題であった。雪解け時代、芸術家の創造的思考が作品の質を決定するようになった。ソ連の日常生活や現代的英雄など現実を反映しうる新たな表現方法が追求され、幅広い市民の共感呼んだ。そのような作品にはタシュコフ（Е. И. Ташков）監督の『Come Tomorrow, Please』（1963年）などが挙げられる。

だが冷戦下、ソ連と米国は映画をプロパガンダの武器としても利用した。両国の映像作品は世論への影響を狙い、二大国の対立を強調することも稀ではなかった。1950年代末から60年代にかけて公開された映画の多くは、ソ連の生活が素晴らしく、アメリカの生活よりも優れていると宣伝した。ソ連ではその内容が十分に愛国主義的でない、あるいは共産党の指導を反映させていないとの理由から、多くの映画が上映禁止となった。

アーロフ（А. А. Алов）とナウモフ（В. Н. Наумов）により撮影された映画『怯える若者（Тривожна молодість）』、ミロネル（Ф. Е. Миронер）とフーツィエフ（М. М. Хуциев）による『ザレチナヤ通りの春』といった映画作品は観衆から高く評価された。1956年度の最高の映画は、サフチェンコ（И. А. Савченко）とアーロフ監督作品の『タラス・シェフチェンコ』であった。ソ連の文学作品の映画化は観衆に好まれた。ゴーリキーの小説に基づいたドンスコイ（М. С. Донской）監督の『母』も挙げられる。1970年代初めに映画製作は最高潮に達し、リャザーノフ（Э. А. Рязанов）やガイダイ（Л. И. Гайдай）によるコメディ映画、タルコフスキー（А. А. Тарковский）による哲学的絵画ともいえる映像作品や、子供向け作品などが公開された。

だがこのような発展の陰では、タルコフスキー、リュビモフ（Ю. П. Любимов）、プロドスキー（И. А. Бродский）、ガリチ（А. А. Галич）、ソルジェニーツィンなど多くの芸術家がソ連を去り、海外へ移住せねばならなかった。

5 ウクライナ・ソビエト社会主義共和国における絵画と美術

冷戦期におけるウクライナ民族の精神的成果について論じる場合、とりわけ造形芸術は重要な位置を占めている。フルシチョフ期に共鳴した作品としては、アラ・ホルスカ（А. А. Горская）によって生誕150周年記念に制作されたキエフ大学本館ロビーの「シェフチェンコ・ステンドグラ

ス」(1964年)が有名である。だがこの作品はその後、当局によりイデオロギー的見地から反社会的と判断され撤去された。またタチアナ・ヤブロンスカ (Т. Н. Яблонская) は、社会主義リアリズムに対峙しつつ、ウクライナ民族芸術の伝統を明瞭に絵画へ反映させる新様式を生み出した。彼女は他の芸術家らと共に1960年代ウクライナ造形芸術界のフォークロアトレンドの創始者となった。フルシチョフ時代は全体としてみれば、ウクライナの文化生活にポジティブな傾向をもたらした。雪解け以降のソ連では、当局公認の路線から外れた創作活動は、非公式の地下芸術、非協調主義などと呼ばれた。

展覧会「ソビエト・ウクライナ」は6,000点以上の新しい作品が出品された当時最大の芸術展であった。1960年にはモスクワで「ウクライナ文学と芸術の十年」と題する展覧会が企画され、戦後ウクライナ芸術の集大成となった。絵画では最前線の兵士の体験を題材に多くの作品が誕生した。ベズグリー (Д. И. Безуглий) 作の『ドニエプル河を制す』、オトロシチェンコ (С. Б. Отрошенко) 作の『ウクライナのドイツ占領軍』、ヤブロンスカ作の『敵が近づく』などが挙げられる。またカシヤン (В. И. Касиян) はウクライナのグラフィックデザイン分野の第一人者となった。

若い芸術家らは、社会主義リアリズムの成す虚偽を拒否し、厳しい現実をありのままに反映させることに挑んだ。彼らのキャンパスの英雄は、たいていロマンティックな職業の人々、例えば極地探検家、または極東地域を征服した若いコムソモールの団員であった。彼らは全体主義の中の顔のない歯車の一つではなく、むしろ国を変えようと決意した若く教養のある非凡な才に溢れた人間であった。1957年にソ連が初の地球軌道人工衛星を打ち上げて以来、宇宙探索というテーマはソ連の集合的記憶のみならず、芸術的表現においても特別な位置を占めるようになった⁽¹⁴⁾。このような様式はチェカニユク (В. А. Чеканюк)、ザレツキー (В. И. Зарецкий)、ヴァインシュテイン (М. И. Вайнштейн) らの作品に反映された。

ソ連ではモニュメント的な彫像、とりわけ大戦の英雄、労働運動での功労者など、多くの党や軍指導者の記念碑が建立された。1954年にはキエフでシチョルス (Н. А. Щорс) の記念碑が彫刻家ライセンコ (М. Г. Лысенко)、ボロダイ (В. З. Бородай)、スホドロフ (Н. М. Суходолов) らによって制作された。当時の最高芸術の一つは、1962年に彫刻家コヴァリョフ (А. А. Ковалёв) によって制作されたキエフのプーシキン記念碑である。

ホルスカやザレツキーは芸術家として同時に活発な政治活動を行い、1960年代のウクライナ民族志向の象徴となった。当局公式の「リアリズム」は、芸術の伝統からますます逸脱してゆき、ノメンクラトゥーラ的な公式芸術と、他方での真の芸術家らの独自の観念、価値、主題をもった非公式芸術といった二つの並行する世界が次第に形成された。この二つの方向性は相互に対立していたにもかかわらず、多くの芸術家は双方の世界観の協調へ妥協せねばならなかった。1930年代に弾圧された芸術家らの名は、1960年代になって次第に芸術界で復権された。1966年から1969年にかけて、6巻本の『ウクライナ芸術史』が出版された。その編集に携わったキエフ芸術研究所の元所長ヴロナ (И. И. Врона) は、ネオモダニズムは美観の問題のみならず、むしろある世代全体

(14) «Інше» мистецтво і пізній СРСР. 1953-й – кінець 80-х (URL: <https://www.arthuss.com.ua> > pdf > perm_rev01).

の政治的決定となったことを示唆している。

6 ウクライナ・ソビエト社会主義共和国の音楽と西からの流行

スターリン時代のソ連音楽はイデオロギー的機能を担った。雪解け時代のウクライナ音楽芸術は高い芸術性を誇る作曲家リャトシンスキー（Б. Н. Лятошинский）、レフツキー（Л. Н. Ревуцкий）、コザク（С. Д. Козак）らの作品に代表される。また作曲家マイボローダ作のオペラ『アーセナル』、メイトゥス（Ю. С. Мейтис）作の『若い衛兵』、ダンケヴィチ（К. Ф. Данькевич）作の『ボフダン・フメリニツキー』はソ連の内外で知られるものとなった。この時代のバレエ芸術ではスコルリスキー作（М. А. Скорулский）の『森の詩』、スヴェチニコフ（А. Г. Свечников）作の『マラーシャ・ボフスラーウカ』が有名である。1950年代のミュージカル喜劇では、リャボフ（А. П. Рябов）作の『ワンダフルランド』や『赤いカーリーナ』、またザスラフスキー（С. А. Заславский）作の『マリア』などが絶大な人気を博した。

大戦後、ソ連軍によって占領された中東欧地域から物資や衣類がソ連へ持ち込まれソ連社会に大きな影響を与えた。若者たちはソ連の生活とヨーロッパ、西方の世界との相違を意識せざるを得なかった。さらに1950年代後半には欧米の影響を受けた若者たちのサブカルチャー現象としてロックンロールやジャズが広まった。1940年代末から50年代初めにかけて、ソ連では若い世代がソビエトの単調さに抗議し度々暴動が発生したが、これには西側の映画作品が重要な役割を演じていた。例えば、戦後ソ連へ輸入された『Sun Valley Serenade』『オーケストラの少女（One Hundred Men and a Girl）』『ターザン』『The Woman of My Dreams』などが挙げられる。これらの欧米映画を見た若者は、俳優らのスラングを憶えては西側世界のスタイルを真似して振る舞った。レコード盤の不足から使用済みのレントゲン写真を再利用して西側の音源を録音する「骨の上のロックンロール」と呼ばれる動きが若者たちの間に密かに広まった。

1940年代末から50年代初め、レニングラードやモスクワでは、外国人旅行者の訪問を通じ、西側の影響が見受けられるようになった。1950年代半ばに、若者のサブカルチャーは大都市のみならずソ連の辺境にも到達した。ウクライナの首都キエフでも西の影響を受けた若いライフスタイルが広まった。1958年には小都市ファストフで、若者らがジャズオーケストラを結成し、アパートを利用してコンサートの開催を試みた。だがこのような若者の生活態度は「反社会的」として当局より批判され、ソビエトの新聞や公式プロパガンダでは掃討キャンペーンが強力に遂行された。若者たちの不道徳はさげすまれ、ソ連政体の潜在的敵とみなされた。コムソモール（共産党青年団）や学生協議会では、若者の「反倫理的」なライフスタイルに関し議論された。親との対話や、市民自警団による街頭での抜き打ちの取り締まりもあった。「非社会的分子」に対するKGBによる予防措置として、これらの若者は大学やコムソモールから排斥された。全ての措置はウクライナの若い世代を「自由思想」という危険な影響から守り、ブルジョア的文化基準の模倣から遠ざけることを意図していた。サブカルチャーに属する一部のメンバーに対し、強制労働収容所での5年の刑を宣告されたこともあった。

冷戦時代、ソ連が西側陣営とイデオロギー的に対立していたにもかかわらず、ソビエトの若者た

ちは鉄のカーテンを越えて流入する外国からの新しい潮流の影響を一層強く受容した。厳格なソビエト当局の管制にもかかわらず、世界のファッショントレンドは、西側から緩慢ではあるがソ連へ到達した。1957年にモスクワで世界青年学生の祭典が開催されたことは、現代文化、とりわけ新しいファッションがソ連へもたらされる契機となった。

とはいえ、ウクライナでは自由思想は高くついた。当局は、外国からソ連へ入国した全ての人間に対して不信を抱いた。そのような嫌疑は、とりわけイデオロギー的の制御から外れた人々に対して向けられた。その懲罰の一つは党からの追放であった。1991年になってようやくこれらの告訴の多くが取り下げられた。スターリンによる弾圧は、ウクライナの発展を阻害し破壊した。ウクライナの文化教育水準はそれを通じ制約され、結果的にウクライナ民族の伝統の喪失へ導いた。生活のあらゆる側面に対し課された抑圧のため、とりわけ創造的知識人たちの間に隠れた不満がはびこった。反体制派は集会を開き、同人誌を刷り、ピラを撒いた。だがこのような反政府的な知識人活動家らは、当局から迫害され、裁判の末、精神病院へ送られるか、自宅で軟禁された。

おわりに

旧ソ連とソビエト・ウクライナの文化史において、冷戦時代とフルシチョフの「雪解け」は、多くの成果に富む一方で、その意義も成果も一様ではあり得なかった。1975年の国際政治的な緊張緩和まで続いた第二次大戦後の苛烈なイデオロギー的対立は、ソ連のあらゆる文化領域を規定した。党による共産主義的要請はソビエトの垂直的な指令システムを通じ社会のあらゆる側面で貫徹され、創造的知識人らの活動にも大いに影響を与えた。内容的には社会主義的、形式的には民族的という原則に基づくソ連の文化領域における政策は、だが本稿が示したように、民族共和国への支持に関して言えば、それは宣言された公式の目標からはかけ離れ、実際にはあいまいな結果へ導くものとなった。

フルシチョフの「雪解け」期におけるウクライナに対するソ連文化政策は、ウクライナ民族のアイデンティティーの強化に貢献し、また芸術活動における状況の改善へ導いた。創造的知識人らに対する党国家的影響はなお強かったが、ソビエト社会を海外からの影響とその民主主義的傾向から完全に孤立させることは不可能であった。芸術家らは新しさを渴望し、様々な方法で表現を試みた。芸術作品の創造を通じた1960年代ウクライナ芸術家らによる体制への挑戦は、今日的視点から見ても全く際立っている。とはいえ、当時のソ連においてそのような試みは非常に危険でリスクの高いものであった。彼らの作品は時に展示会場へ持ち込まれることなく、ひっそりと破壊される場合もあった。「鉄のカーテン」の向こう側という生存条件下で、ある程度自由化の進展にもかかわらず、基本的にはなお厳格なイデオロギー的統制が維持された全体主義社会においては、当時の試みはウクライナ知識人たちの前進への大胆な一歩であったと評価できよう。コムソモールの文化活動から始まった1960年代の潮流は、その初めの段階では、まだ当局の関心をそれほど刺激しなかった。だが雪解けが収束へ向かう1960年代後半以降、ウクライナの知識人たちはソ連当局がもはや路線から外れた意見を容認しないということを再び認識しなくてはならなかった。ウクライナの知識人のほとんどは、国家との直接対決を避けつつも反対派に留まった。

その後の展開では1975年以降の国際的緊張緩和が、文化領域においてもソ連と西側諸国との関係構築に貢献したことは重要であった。そのような両者の結びつきは、資本主義、社会主義双方の生活様式の利点を享受促進する良き機会としてみなされたのである。

(Viktoriia Vitalievna Soloshenko ウクライナ国立科学アカデミー世界史研究所教授)

(しんどう・りかこ 法政大学経済学部教授)